志村 美土里

メゾソプラノリサイタル

～ふるさとに〝言の葉〟をこめておくる日本のうた～

2024年4月24(水)18:30開演(18:00開場)

高崎芸術劇場 音楽ホール

【出演】志村美土里(メゾソプラノ)、塚田佳男(ピアノ・監修)

主催：みどりの音楽室　マネージメント：株式会社空間あい

後援：高崎市、上毛新聞社、群馬テレビ、株式会社 エフエム群馬、ラジオ高崎、高崎市民音楽連盟、群馬楽友協会、群馬オペラ協会

ご挨拶

ご挨拶

私にとって「うた」の一番古い記憶は幼稚園の卒園式です。
「思い出のアルバム」という歌を歌いながら涙ぐんだことを今でも覚えています。
「おぼろ月夜」や「冬景色」という昔ながらの唱歌がお気に入りだった幼い頃に合唱と出会い、
「流浪の民」のソリストに指名されたのは中学三年生の時でした。
高校一年生で音楽の道を志した時、数々の素晴らしい出会いとご縁を頂けたことはやはり「高崎」という音楽の街に生まれ育ったことが大きかったと思います。天田美佐子先生から声楽の基礎を、塚田佳男先生から日本歌曲の真髄と合唱音楽の素晴らしさを叩き込まれたことが、声楽家・プロ合唱団員としての今の自分を形作っています。
愛する高崎で初めてのリサイタル、塚田佳男先生の美しい音と深い解釈に導かれ、お越し下さる皆さまの心に少しでも触れる演奏がお届けできましたら、これ以上の喜びはありません。
卯月の麗らかな宵、皆さまと「うた」との素晴らしい一期一会を祈りつつ、ご挨拶とさせて頂きます。

感謝を込めて。

志村美土里

志村美土里さんのリサイタルに寄せて

日本語の曲を上手に歌える日本人歌手はなかなかいない。というのは変な話ではあるのだが、本当のところそうなのである。どうも、上手に歌うこと、つまり声楽の研鑽を積むことと、日本語の発音・発声を成立させることの両立が難しいらしい。突き詰めていくと、これは日本の声楽教育の大きな問題と言わざるを得ない。
目を瞑って聴いて、その歌詞をハッキリ聞き取ることの出来る歌手は、ほぼいないのではないだろうか。あるいは、聴衆側が知っている歌詞を頭に思い浮かべて聴くことで、それが手助けになることも多々あると思うが、もっともそれは聴衆が知っている曲に限られてしまう。
志村美土里さんは、それが出来る実に貴重な歌手の一人である。ひたむきに努力を続けられ、精進を重ねてきた結果であるのはもちろんだが、それに加えて、歌を通して相手の心を動かせる、つまり人を感動させることのできる稀有な歌手だ。それは、志村さん自身が音楽に感動する繊細な心を持っているからこそである。
得意の日本の歌曲で構成された今回のリサイタルの開催を心から嬉しく思うと共に、最大限のエールを送りたい。
今宵も音楽が羽ばたきますように。

指揮者・東京混声合唱団音楽監督　山田和樹

プログラム

【春のうた】

花の街	江間章子 作詩／團伊玖磨 作曲
さくら横ちょう	加藤周一 作詩／中田喜直 作曲
春の鳥	北原白秋 作詩／團伊玖磨 作曲

【花々に寄せて】

さざんか	藪田義雄 作詩／猪本隆 作曲
牡丹	北原白秋 作詩／橋本國彦 作曲
からたちの花	北原白秋 作詩／山田耕筰 作曲
松の花	大木惇夫 作詩／磯部 俶 作曲
くちなし	高野喜久雄 作詩／髙田三郎 作曲
ばら・きく・なずな －母に捧ぐ－	星野富弘 作詩／新実徳英 作曲

── 休憩（20分）──

【コンクール歌唱曲より】

電話	川路柳虹 作詩／山田耕筰 作曲
叱られて	清水かつら 作詩／弘田龍太郎 作曲
宵待草	竹久夢二 作詩／多 忠亮 作曲
曼珠沙華	北原白秋 作詩／山田耕筰 作曲
『寂しき夜の歌』より	大橋房子 作詩／山田耕筰 作曲
・衣ずれの雨	
・をとめの心	

【懐かしいうた ～あなたからのリクエストへ～】

ゴンドラの唄	吉井勇 作詞／中山晋平 作曲
津軽のふるさと	米山正夫 作詞／作曲
湖畔の宿	佐藤惣之助 作詞／服部良一 作曲
カチューシャの唄	島村抱月・相馬御風 作詞／中山晋平 作曲

プログラムノート 文責：志村美土里

【春のうた】

◆花の街　江間章子 作詩／團伊玖磨 作曲

1946年（昭和21年）詩人 江間章子がNHKラジオの依頼により戦後の焼野原だった東京に空想の花の街を描いた。團伊玖磨は童謡・歌曲・合唱曲・オペラ、随筆と戦後から平成に至るまで多彩に活躍。草創期の群馬交響楽団を描いた映画『ここに泉あり』の音楽も担当した。

◆さくら横ちょう　加藤周一 作詩／中田喜直 作曲

思想家・評論家で“知の巨人”として知られる加藤周一は「マチネ・ポエティク」という日本語による押韻定型詩を作る文学グループに参加した詩人でもあった。中田喜直は桜の花びらの舞う光景を繊細な音の世界へと素直に変換している。

◆春の鳥　北原白秋 作詩／團伊玖磨 作曲

歌曲集『三つの小唄』の一曲目。「鳴きそ」「な鳴きそ」は「な～そ」とその省略形「そ」により柔らかい禁止・制止を表し、「鳴かないでおくれ」と行く春を惜しむ想いを投影している。鮮やかな肩衣の色、大川（隅田川）の黄昏など、鮮やかな色彩に邦楽的要素があいまって、あたかも錦絵を見るような音楽に仕上がっている。

【花々に寄せて】

◆さざんか　藪田義雄 作詩／猪本隆 作曲

“語り歌曲”という分野で独自の境地をひらき、現在も歌い継がれる数々の名作を遺した猪本隆の初期の作品。小田原生まれの藪田義雄は旧制小田原中学三年の時、その地に住む北原白秋の門人となる。詩のほか、白秋の初の本格的伝記などを書いた。
サザンカに降り注ぐ冬の朝の光…冷たい空気の中にも暖かく優しい気持ちが溢れる。

◆牡丹　北原白秋 作詩／橋本國彦作曲

北原白秋「柳河風俗詩」に収められている詩の一つ。橋本國彦は團伊玖磨・芥川也寸志・黛敏郎らの作曲の師。交響曲、歌曲、「朝はどこから」などラジオ歌謡も手がけた。
大ぶりで華やかな牡丹の花びらがはらりと散りかかる様子に、互いにすべてを知り尽くした男女の倦怠と、破局を予感した女の気持ちを託している。

◆からたちの花　北原白秋 作詩／山田耕筰 作曲

山田耕筰の少年時代の思い出（実父を亡くした後、活版工場で働きながら「自営館」というキリスト教系の施設で暮らした）を原案として北原白秋が書いた詩である。山田耕筰が後年「私の曲のうちで最も大衆に親しまれているものだが、最もむづかしい曲の一つ」と述べている。東京混声合唱団の新入団員オーディション（2次試験）の課題曲として使われている。

◆松の花　大木惇夫 作詩／磯部俶 作曲

合唱曲「遥かな友に」で有名な磯部俶は早稲田大学グリークラブOBで指揮者・作曲家。大木惇夫は合唱組曲『土の歌』（終曲の「大地讃頌」は全国で愛唱されている）の作詩者。抒情的な歌詞と、場面と時間の推移を感じさせるドラマチックな旋律により、詩の背景にある物語を想像せずにはいられない。

◆くちなし　高野喜久雄 作詩／高田三郎 作曲

合唱作品の超定番にして名曲『水のいのち』と同じ高野喜久雄・高田三郎のコンビによって作られた歌曲集『ひとりの対話』（全6曲）の終曲。クチナシは、秋に熟しても実が割れないことからその名がついたと言われ、その姿に人生を投影する詩人の亡き父からのメッセージが込められている。

◆ばら・きく・なずな －母に捧ぐ－　星野富弘 作詩／新実徳英 作曲

1985年初演の混声合唱組曲『花に寄せて』の終曲。群馬県勢多郡東村（現在のみどり市）生まれの詩画作家、星野富弘の心洗われる詩に、易しくかつ新鮮な音で作曲し大きな話題を呼んだ作品。ソプラノ歌手松本美和子氏のリサイタルに際し独唱アレンジされた。新島学園聖歌隊時代に涙ぐみながら歌った思い出の一曲。

【コンクール歌唱曲より】

◆電話　川路柳虹 作詩／山田耕筰 作曲

1927～29年（昭和2～4年）にかけて刊行された『童謡百曲集』の中の一曲。冒頭のピアノパートの電話の描写がユニークな通節歌曲。昭和初期の電話の音が、楽譜をタイムカプセルとして保存されているかのよう！日本歌曲コンクールの一次審査などで何度も歌っている十八番的な一曲。

◆叱られて　清水かつら 作詩／弘田龍太郎 作曲

1920年（大正9年）少女雑誌『少女号』上で発表された唱歌。清水かつら自身の幼い頃に母と生き別れた悲しみを、親元を離れ奉公へ出された子供の心境と重ね合わせたといわれている。和光市主催「清水かつら記念 日本歌曲歌唱コンクール」での課題曲。

◆宵待草　竹久夢二 作詩／多忠亮 作曲

画家で詩人、大正浪漫の旗手として知られる竹久夢二の三行詩に、多忠亮（おおのただすけ）が作曲し1917年（大正6年）芸術座公演にて初演。実は［ヨイマチグサ］という植物は無く、正しくは［マツヨイグサ］。夢二があえてそうした？単に間違えた？実は［ツキミソウ］のつもりだった？など議論や推論が尽きないのも、一世を風靡した流行歌ならでは。岡山県瀬戸内市主催 第5回夢二コンクールでの課題曲。

◆曼珠沙華　北原白秋 作詩／山田耕筰 作曲

連作歌曲集『AIYANの歌』の4曲目。GONSHAN（ごんしゃん）とは柳川の方言で「良家のお嬢さん」のこと。これを幼女とみるか子供を産んだ母親とみるかで解釈がわかれる。山田耕筰の数ある作品中でも屈指の名曲。第3回 日本歌曲コンクールin薬師寺本選にて、阿弥陀三尊浄土図の前で歌わせて頂いた。

プログラムノート

◆『寂しき夜の歌』より　大橋房子 作詩／山田耕筰 作曲
衣ずれの雨／おとめの心

1923年（大正12年）に出版された4曲からなる歌曲集。作詩の大橋房子は山田耕筰の姉のガントレット恒子の秘書を経て作家となった女性。断髪洋装で渡欧経験もあるモダンガールだったそう。なお、ガントレット恒子はキリスト教婦人運動家。共愛女学校（現在の共愛学園）で英語を教えていたこともある。
第33回 奏楽堂日本歌曲コンクール本選演奏曲。

【懐かしいうた ～あなたからのリクエストへ～】

◆ゴンドラの唄　吉井勇 作詞／中山晋平 作曲

1915年（大正4年）芸術座公演「その前夜」の劇中歌。ゴンドラとは水の都ヴェネツィアの水路をゆく手こぎボートのこと。儚い若さと熱い恋心を、先をも知れずに漂いながら進む舟路になぞらえた。黒澤映画『生きる』で志村喬が歌う、静かで熱い感動的なシーンも蘇る。

◆津軽のふるさと　米山正夫 作詞／作曲

1952年（昭和27年）の松竹映画『リンゴ園の少女』にて、主演の美空ひばり（当時15才）が歌った挿入歌。この映画の中では「リンゴ追分」も歌われている。演歌というよりは抒情歌的な品格のある風情に、クラシック歌手にもしばしば歌われる名曲。

◆湖畔の宿　佐藤惣之助 作詞／服部良一 作曲

1940年（昭和15年）高峰三枝子が歌いヒットした歌謡曲。作詞の佐藤惣之助は萩原朔太郎と交流があり、朔太郎の妹と再婚している。「湖畔の宿」は榛名湖をモチーフにして作詞したとのことだが、高峰自身は芦ノ湖をイメージして歌っていたらしい。戦時中は慰問先の兵士からリクエストが多く寄せられたそう。

◆カチューシャの唄　島村抱月・相馬御風 作詞／中山晋平 作曲

日本歌謡初のヒット曲とされる「カチューシャの唄」は1914年（大正3年）初演の芸術座「復活」の劇中歌として主演の松井須磨子が歌い、レコード化された。東京混声合唱団のレパートリーのうちの1曲。2011年（平成23年）6月の演奏会が収録されたCD「林光　指揮・ピアノ・編曲による日本抒情歌曲集（全曲）」（fontec FOCD9561/2）では「カチューシャの唄」のソリストを務めた。

プロフィール

志村美土里（メゾソプラノ）
Midori Shimura, Mezzo Soprano

群馬県高崎市出身。新島学園高等学校卒業、国立音楽大学声楽学科卒業。1997年東京混声合唱団入団、2005年より2024年3月までアルトパートマスターを務める。全国の主要オーケストラとの共演や国内外での演奏会に出演するなど中心メンバーとして活躍中。2024年10月ヨーロッパ公演（モナコ・フランス・ルクセンブルク）を予定している。BS朝日『子供たちに残したい美しい日本のうた』東混ゾリステンメンバー。山田和樹 指揮モーツァルト「レクイエム」（第27回丹沢音楽祭）アルトソロ、ヘンデル「メサイア」、メンデルスゾーン「パウルス」等、宗教作品のソリストも務める。
近年では日本歌曲の分野で活躍中。上毛新聞社主催「塚田佳男のピアノで歌う日本の歌コンサート」、〈友〉音楽工房シリーズ「日本歌曲の今」～三善晃没後10年の今～、東京室内歌劇場主催公演など、数多くの演奏会へ出演。
東京都立高等学校部活動指導員。キリン合唱団ボイストレーナー。
東京混声合唱団アルト団員。（一社）東京室内歌劇場会員。

【受賞歴】
2018年 第17回清水かつら記念日本歌曲歌唱コンクール第2位（和光市長賞）
2021年 第5回夢二コンクール第1位
2022年 日本歌曲コンクールin薬師寺第2位
2022年 第33回奏楽堂日本歌曲コンクール第2位（木下記念賞銀メダル）
2023年度 公益財団法人 企業メセナ群馬より芸術文化奨励賞を授与される。

塚田佳男（ピアノ・監修）
Yoshio Tsukada, Piano&Supervisor

群馬県出身。群馬県立高崎高等学校を経て、東京藝術大学音楽学部声楽科卒業。二期会等でオペラや各種コンサートの伴奏・コレペティトゥーアを務めた後、75年から77年までドイツ・デトモルトにてピアノ・オルガン・伴奏法を学ぶ。帰国後から現在に至るまで歌を知りぬいた繊細な音楽性で、特に日本歌曲の研究、解釈、伴奏においては現在日本の第一人者としての活動を続けている。
畑中良輔氏と共に企画・構成に携わり、その伴奏の殆どを受け持ってきた、93年より続く音楽の友ホールでの《日本歌曲シリーズ》を代表に、日本歌曲や日本の歌による演奏会での企画構成と演奏は、国内はもとより海外においても高い評価を得ている。
様々な歌手の伴奏を務めたCDは多数リリースされている。また、セミナー等での講師としての活動も、日本歌曲の歌唱法および伴奏法の指導を中心として全国各地で行っており、多くの歌い手とピアニスト達を育成している。日本演奏連盟所属。